

小さな部屋で夢を織る

—吉田美保子さんの華色紬—



紬を織る吉田さんが顔を上げたときに目に入る位置に張られているのは、モネの「藤」。しま織つてある作品のイメージノースだ。

日あたりよい縁側に機があり、日々の仕事をこなしながらトントンからりと織つていく。そんな昔話みたいな紬織りを、ふと重ねてみたくなるような吉田美保子さんの染め織り仕事。でも。彼女が織り上げる紬は、透明な光を秘めたきれいな色。紬の素朴さと都会の感性が、小さな部屋で運命的に出会い、新しい美しさを育んでいる。

文 構成 田中敦子 撮影 神ノリ智早

「心を開放して自由に織る、法に従つてきちんと織る。この両方を同時に実現したい。そう思いつつ、日々織機に向かってします」。吉田さんがブログに綴った、織りへの思い。



池袋から、最近ならば開通したばかりの副都心線を利用して2駅め。千一という駅から吉田さんの仕事場を目指して歩く。スパ、コノビー、歯医者さん。マノショノや新し戸建て。東京の町によくある風景が続いている。
あ、と耳をます。トノトノと機を織る音が聞こえてくる。

この家? おそらく昭和40年代の木造アパート。ここで吉田美保子さんは紬の糸を染め、織り、暮らしている。

小さなたたきを上るとすぐ「キツチ」。その奥に六畳と四畳の間があり、機とそれにもつわる道具が所狭しと、でも目を見張るほどに機能的に整理整頓、配置されている。

「狭いから、工夫しないと。ここで暮らして8年になるんですけど、工夫し尽くすところまでし尽くした感じです」と、迎えてくれた吉田さんよ、小さなキツチノでお茶を用意しながら、笑う。

これまで出会つたさまざまな織り手の仕事場を思い出す。おそらく、着物反織る人で、吉田さんの仕事場は最小。でも、狭さを感じない。居心地がいい。きっと、吉田さんがこの空間を最大限に使って、わが城にしているからだろう。

着る人の欲しいものが 私のつくりたいもの

紬織りは、農家の女性の農閑期の仕事だった。玉繭やくず繭など、規格はずれの繭を使って着物地を織る。台所で糸を染め、縁側や庭先で糸の準備をし、家の



染め分けられて 出番を待つ緯糸(よこいと)。一回で欲しい色に染まることがあるし、何度も染め重ねることも。「同じ植物でも、毎回色が違います。発色させる媒染剤によっても変わるし、何度も染めても驚きの連続なんです」



キッチンにて。植物を煮出した液に絹糸を浸し、たぐりながら染めていく。



玄関の下駄箱は、いつのまにか染料や媒染剤がずらり並ぶ場所になっていた。

植物染めは、毎回驚きの連続なんです

隅に置かれた機で、無じに紬を織った。苦労だったろうけれど、その人なりの工夫や感覚が加わる仕事であり、着る人が家族であれば、どんなものが似合うかな、今度はこんなのを着せてあげようか、としを遊ばせながら織つただろう。

吉田さんもまた、着る人のことを想いながら紬をつくる。

「私のつくりたいものは、着る人の欲しいものの中にあると思うんです。私が欲しいものよ、人の欲しいもの。それで喜んでもらえればうれしいんですよ」

たとえば、いままさに機にかかるつる紬地よ、モネの作品『藤』のイメージで、というリクエストだった。

「言葉のやりとりがすいぶんありました。最初は、単衣で、無地でなくて縞でもなくて、ほかしかな、という感じ」

さらに、紫が好き、ただし青み系の、初夏の庭園みたいな、具象ではなく抽象モネの『藤』の絵みたい。光が眩しい、風が爽やか、緑がきれい、藤の花や杜若花。ああ気持ちいい。

「そんな感じで決まる、設計図です」

織るものになるべく
“私”を入れたくない



杼にセットするため、緯糸を管(くだ)巻きする。手作業で丁寧に巻いていく。



管に巻かれた緯糸。この繊細な色たちが、モネの“藤”的イメージを描く。



杼にセットされた何色もの緯糸。これらを設計図に沿って織り込んでいく。



糸を染めたら、整経という経糸(たていと)づくりをして機にセットし、それから設計図に沿って緯糸を揃える。そうしてはじめて織り始めることができるのだ。杼(ひとと)呼ばれる道具で緯糸を左右に飛ばしながら、着実に織り進めていく。

微妙に色や糸を混ぜて複雑な奥行きを出したい

「その、きれい、を実現するために、草木から色をもらい、糸を染める。小さなキッチノが染め場に変わる。
「植物染めって料理と変わりないから、キッチノできちやうんです」

季節により、染料により、糸により、染まり方も違う。塩梅を見ながら、染めていく。染まつた糸を干すのも、雨が降れば、この家中。この糸を、作品のイメージに合わせて、巧みに組み合わせる。また、真綿糸にところどころ座繰り糸を混ぜる、なんてことも。真綿糸は、綿

イメージを具体化する作業だが、ここはかなり厳密にやるという。
「曖昧なところはなるべく排除して、理詰めで設計します。曖昧なところを残すと、素人っぽくなってしまうんです」
きつちりやつた上でも出る、自然素材、手仕事の気まぐれが味になるのだ。「そして、まさきれいでしょ、でいいんです。大変な仕事 素晴らしい、ではなくて」



糸は、こんな風に染めたくない部分をビニールテープできっちり括(くくってそこだけ染まらないようにする。

クレー憧憬



クレーの絵を と思い立って織った帯。緻密に設計図をつくり 糸で織った。縞風には見えないけれど 縞しまの色分けは糸によるもの。

檸檬畑にそよぐ風



南イタリアの檸檬畑の写真を手渡されて「檸檬畑にそよぐ風みたいな、爽やかな空気感のある着尺を」と。こうした抽象的な依頼が多いとしう。

状にした繭から糸を引き出すマツトな糸。座繰り糸は、繭を茹で、蚕が吐いたままの糸をするするとほどいて取る光沢糸。色だけでなく、糸の光沢も計算に入れ、きれいな袖を織り上げているのだ。

ところで、いま織っている作品の依頼主も、使っている糸も、実は吉田さんが書き続けているブログが縁結びだった。だが、豊かな絵画的感性と、手で布をつくることへの熱い思いあふれる彼女のブログは、「この人に託したい」という気持ちにさせる引力を持つている。

「不思議ですね、人付き合いが上手でもないのに、いい縁ができるなんて」

座繰りの糸は、志を持って糸取りをしていた女性が、もう仕事を続けられないからと、糸を生かしてくれる人を探して、吉田さんにたどり着いた。

押し入れから、どつさり糸を取り出し、吉田さんは見せてくれた。瑞々しいうぶな糸。これを染めて、時には糸にして、新たな美を描くのが、「織り」なのだ。

「均質ではないからいいんです。いい悪いではなく味わい。糸の持ち味をどう生かすか。せっかく私に託してくれたのだから、上手に帶や着物に生かし、着る人にバトンタッチしないといけませんね」
引っ越ししたけれど、部屋全体が織るために出来上がってしまった。多分しばらくこの部屋で、吉田さんは、素敵な縁を結びながら、みんなの夢を布にしていくのだろう。



糸つて本当にきれい。
これを生かさなきや、ですね

よしだみほこさん

1968年熊本県出身。東京造形大学美術科中退後、
英國へ。帰国後、織りに出会い、「93年より働き
ながら織りを始める。2003年から専業で制作を
始める。'09年3月には銀座もとし「ぎゃらりー泉」
にて 作品展開催予定。吉田さんのブログは、
<http://someori.cocolog-nifty.com/>で読むこと
ができる。